第 43 号
発　行
筑波山がまの油売り口上研究会

令和四年度は
新たなる飛翔の年に！

会長　林　正一

会員の皆様には、当研究会の運営並びに事業の推進にあたりましては、多大なるご支援・ご協力を賜り厚くお礼を申し上げます。

振り返れば、令和三年度も、二年度に引き続き新型コロナウイルス感染症に振り回された一年でした。いまだに感染拡大の収束（終息）が見えないコロナウイルスに世界中が影響を受ける中、社会生活においても行動制限が求められています。日本では予防策として、「三密」を避ける身体的距離を取りながら、マスクの着用や手指の消毒など、私たちの日常生活にも大きな変化が生じました。新しい生活様式に対応した動きが、今では当たり前のように定着化しております。

当研究会でも、感染拡大を予防するため、令和二年度さらには三年度における年間の活動全般を休止するなど、国・県における感染対策の動向を注視しながら、会員の健康管理を最優先に努めてまいりました。

令和四年度は、新たに確認された変異種「オミクロン株」の子どもや高齢者への感染拡大など、いまだ厳しい状況が続いておりますが、ワクチンの三回目接種や経口薬の承認など回復に向けた明るい兆しも見られるようになりました。感染拡大が収束に向かい、元通りの日常生活を取り戻し、「がま研」の活動が一日も早く再開できることを切に願っております。

歌舞伎役者の故・中村吉右衛門さんが**「常に上を向いていかなければ、芸は落ちていく、あるいは滞ってしまう。高みを目指して修行を続けなければ、芸は停滞し、下がる一方である。」**と話されていました。

私も、口上を覚えたての頃に「がま口上は、トライ＆エラーの連続で、挑戦に失敗はつきもの。失敗を恐れては前進しない。」と自分に言い聞かせながら、実演に臨んでいたことを思い出しました。

新年度は、活動を休止した2年間分の「芸（口上）の勘」を取り戻すため、初心に帰ったつもりで練習に励み、ボランティア活動の推進のため一緒に頑張っていきましょう。

結びに、皆様方の益々のご活躍とご健康・ご多幸をご祈念申し上げ、新年度初めのご挨拶といたします。

令和４年度　定期総会の開催について

日　時:5月14日(土)午前10時～（講演会等はありません）
会　場:土浦市小野491
土浦市立「小町の館」　☎029－862－1002
※当日、年会費の納入をお願いいたします。

なお、前年度予算の執行が抑えられているため、令和４年度につきましては、**年会費の半額1,000円** の納入を予定しております。

欠席の方は下記の口座までお振り込みください。
ゆうちょ銀行　口座番号:10690－38833081
口座名:筑波山がまの油売り口上研究会

㊟総会案内のハガキはお送りしませんので、ご了承ください。
コロナの状況により開催できない場合は、ご連絡いたします。

がまの油売り口上研究会
ホームページ
是非お気に入り登録をお願いします
http//gamaken.wp.xdomain.jp/

【お詫び】かわら版42号のヘッダーが第41号となっていました。お詫びいたします。

昭和・平成・令和の時代を振り返って

（私の生き様　思いのままに・・・）

成　田　敏　夫

◆～団塊世代・高度成長期・バブル崩壊・大リストラ等を乗り越えて～

昭和二十二年筑波山麓の農家で出生（第一次ベビーブーム・団塊世代）。戦後の復興期で世は貧困だったため、小学校の教科書等は近所の必要な人に譲り合い使った。竈やお風呂の薪代わりに、筑波山の中腹で松葉さらいをしていた人（日常）もいた。

中学校の時、教員の子の弁当が白飯で私は麦飯、当時は普通なのには劣等感を抱いた。高校は工業系に進んだ。昭和三十九年は戦後の東京復興五輪で国中が高揚していた。でも私にとっては最悪で落胆した年だった。二月に母（49）を、七月に戦争未亡人で同居の伯母（59）が続けて病死。その為期末試験を受けられず零点。追試験で何とか進級。思春期で多感な時でもあり「心」の動揺は隠せなかった。

卒業後は横浜磯子の「日飛」に就職したが三ヶ月で退社。同室の一人が寝具持参で出張したことを管理人が忘却。私は許可得て休日に外泊していたが、寝具がないので夜逃げしたと勘違いされ、即刻あちこちに電話されて大騒ぎに。（頭にきた。）

まもなく親父からFJの中途採用試験を勧められ早速応募。六月二十四日から採用されバス・電車で通勤。高度成長期であり、従業員も五千人超、小山駅から会社まで約二㎞の道路は通勤者で連なった。蒸気機関車の石炭の粉が目に入り痛かった。母不在の寂しさを酒で気を紛らす日々。酒は強くなり職場でも横綱級に、若気の至りで酒気帯び運転も常習だった。道交法の改正で罰則が厳格になり改心した。以来、飲酒運転は御法度皆無。たばこは、昭和五十三年二月二十日、突如禁煙。それ以来一本も銜えていない。

この年から何故か海外の仕事が増え通算約十五年間で、訪問した国は十五カ国以上。誇りは仏語圏で通訳なしで業務推進できたことぐらいか。苦労と思い出の詰まった海外業務だった。五十六才で役職定年を迎えた。

がま口上は定年後の趣味を考えていた時に「がま口上講座」を知り受講したのが始まり。定年間際は大リストラの真っ只中で送別会などままならない時世だったが、あの時花束を貰って送別されていたら完全にリタイアしていたかも。これを機に、再就職に向け奮起。これまでのキャリアを棚卸し、風呂敷を少し広げて活動開始。何十社かにアプローチし、最後にJAXAの管理部門で六十七才までお世話になった。JAXAではそれまで経験を思う存分発揮でき、とても有意義だった。

最後に振り返ってみて、後悔の念は、母親に親孝行できなかったこと。これも浮き世の定めか。

◆～新型コロナ禍（パンデミック）と東京五輪　この先は～

足かけ三年に及ぶ自粛生活。何度も重点措置等が繰り返されたが未だに収束の見通しはたたない。一方、東京五輪は直前まで迷走、国論を二分した異例（理念？）・異形（無観客）で開催された。この間、コロナ感染は急拡大し医療は逼迫状態。当初の「復興五輪」は名目で「お祭？」「選挙目当て？」「多様性？」、理念が不明。この迷走は、政権の無為無策・後手・場当たり的・司令塔なしの無責任等が要因と考える。

長引く自粛で国民はうんざり、早期収束を神に祈る。五輪で金二十七、銀十四、銅十七は最多でドラマや絆もあったが、これだけで成功と喜ぶのは早合点と思う。コロナ対応や五輪で政府債務残高（借金）の対GDP比は前年四月で256.5％に達した。この先、債務返済や五輪の巨大施設の維持管理等の課題は政治家の急務である。この評価は何年先にでるか。復興五輪はまやかし、東京で金（巨大再開発）が必要なためではないか。本当に復興五輪というなら仙台を拠点に東北の開発のために大金を使うべきと思うが。

◆～ここ十年来の私の日課（目標）～ゴイチ（自己採点）

ゴイチとは、一が五つ。つまり

①「一万歩」以上を歩く　（七〇点）
②「一千字」以上を読む　（一〇〇点）
③「一百字」以上を書く　（一〇〇点）
④「一拾人」の方と対話をする　（五〇点）
⑤「一日一善」　（三〇点）

平均（六十六点）かな。

皆さんもこの機会に実践してみませんか。

民話の広場

昔話の中には、恩返しにまつわる話が沢山あります。本会に欠かせない**カエル**と**桃の節句**が出てくるお話をお届けします。田畑の害虫を食べてくれるカエルは昔から大切な生き物でした。

むかしむかし、ある村に、おばあさんと美しい娘が二人で暮らしていました。

ある年の田植えの季節に、おばあさんは町へ買い物に出かけました。帰りに田んぼのあぜ道を歩いていると、ヘビがカエルを追いつめて、今にも飲み込もうとしています。

「これこれ、何をする。許しておやり。欲しい物があれば、わしがやるから」

カエルを可愛そうに思っておばあさんが言うと、ヘビはおばあさんの顔を見上げながら言いました。

「それなら、娘をわしの嫁にくれるか？」

おばあさんは、ヘビの言う事などとあまり気にもとめずに、

「よしよし。わかったから、カエルを逃がしてやるんだよ」と、返事をしてしまったのです。

すると、その年の秋も深まった頃、若い侍が毎晩娘の部屋へやって来て、夜がふけるまで娘と楽しそうに話していく様になったのです。

そんなある日の事、一人の易者が家の前を通りました。おばあさんは易者を呼び止めると、娘には内緒で毎晩の様にやって来る若い侍の事を占ってもらいました。

すると易者は、こんな事を言いました。

「ほほう。その若い侍の正体は、ヘビじゃ。ほうっておくと、娘の命はなくなる。娘を救いたいのなら、裏山の松の木にワシが卵をうんでおるから、その卵を侍に取ってもらって娘に食べさせるんじゃな」

おばあさんはビックリして、この話を娘にしました。娘もおどろいて、その晩やって来た若い侍に言いました。

「実は最近、とても体がだるいのです。元気をつけるために、裏山の松の木に巣をつくっているワシの卵を取って来て食べさせてくださいな」

「よしよし、そんな事はたやすい事よ」

次の日、若い侍は裏山へ行って、ワシの巣がある高い木に登っていきましたが、その時、いつの間にか若い侍はヘビの姿になっていたのです。

そして木をよじ登って巣の中にある卵を口にくわえたとたん、親ワシが戻って来ました。親ワシは鋭い口ばしで、大事な卵をくわえたヘビを何度も突きました。そしてヘビは頭を食いちぎられ、血だらけになって木から落ちていきました。

その頃、あの易者がまたおばあさんの前に現われると、おばあさんに頭を下げて言いました。

「実はわたしは、いつぞや田んぼのあぜ道で命を救われたカエルなのです。娘さんの体には、まだヘビの毒が残っております。これからは毎年、三月三日の節句(せっく)にお酒の中に桃の花びらを浮かべてお飲みください。そうすればヘビの毒はかりではなく、体にたまったどんな毒もみんな消えて、きれいになりますから」

そう言うと目の前の易者の姿はたちまち消えてしまい、一匹のカエルが庭先の草むらの中へピョンピョンと飛んでいったのです。

桃の節句で、お酒の中に桃の花びらを浮かべて飲む様になったのは、この時からだという事です。

香川県の民話「カエルの恩返し」より

蛙ばかりでなく鶴・狐・猿・カワウソ等、似たような恩返しの話は、全国各地に伝わります。

歴史探訪会

期　　日：令和４年６月18日（土）
場　　所：鹿島神宮（鹿嶋市宮中2306-1）
集合時刻：午前10時
集合場所：大鳥居前（第一駐車場脇）
　　駐車場は有料（300円/日）
昼　　食：散策後、各自自由におとりください。
申　　込：希望者は、林会長に直接電話にて
　　（各教室で取りまとめできない方）
申込期限：５月31日（火）

※今後の感染状況により、中止になる場合もあります。

あの鐘楼は 今いずこに・・③

佐藤貞弘

「昔あったあれは今どうなっているのだろう」シリーズの第三弾。大御堂・二体の仁王像に続き、鐘楼についてです。

昔あったあれは今どうなっているのだろうか。筑波山に関連するものを中心に軽～く紹介します

一六三三年(寛永一〇年)徳川三代将軍家光により建立された知足院中禅寺は、本堂(大御堂・千手堂)を中心に多くの堂社が立ち並び一大観光地として賑わっていたが、江戸時代から明治時代への転換期に廃仏毀釈の影響を強く受け、大御堂や堂社、多くの仏像・仏具が焼き捨てられたという。

その後大御堂の跡地には一八七五年(明治八年)に筑波山神社拝殿が建立された。境内には江戸時代からの建物と自然が多く残されており、コロナ禍の中ではあるが筑波山観光の中心として大勢の参拝者・登山者等で賑わっている。

絵図（①）には、大御堂の段下に仁王門(現随神門)があり右隣には大御堂と同時期に建立された朱塗りの鐘楼が描かれているが今はない。さて、この鐘楼はどうなったのだろうか。

①筑波山下画図より

明治の廃仏毀釈で撤去された鐘楼は宗派を同じくする真言宗豊山派の慶龍寺（②）（つくば市泉二三四八)に移築され貴重な文化遺産が守られています。慶龍寺にはこの他、大御堂の本尊千手観音菩薩坐像の左右に十四体ずつ安置されていた木造二十八部衆像（③）の一部十七体が保存されている。

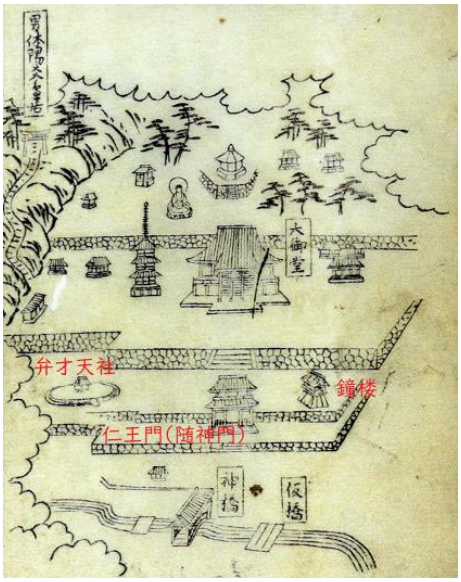
②慶龍寺鐘楼

慶龍寺の本尊は子育出世正観世音菩薩で出世観音とも言われるが「泉の子育て観音」として知られている。旧筑波町北条の西方にあり桜川の左岸に広がる静かな田園地帯にあります。

【補足】江戸時代の筑波山を伝える絵図等は沢山残されており、比較することで正しい位置を知ることができます。添付した筑波山下画図（①）で鐘楼は仁王門と同じ高さにありますが、一段高いところに弁才天社(厳島神社)と鐘楼を表示している筑波山名跡誌（④）の方が現況に即していると思われます。

③特別展筑波山より二十八部衆像の一部

④筑波山名跡誌より



編集後記

ようやく春の気配がと心浮き立つ思いが、ウクライナの惨状を目の当たりにして吹き飛んでしまいました。コロナの脅威もまだ居座る中での蛮行に唖然とし、寒さに震えながら避難する人々の悲しみは察するに余りあります。戦争を知らない子供たちと自嘲していた我ら世代も、平和の大切さを改めて我が心に問いたいと思います。

本号がお手元に届くころ、侵攻が平和裏に解決していることを祈りながら。

次号の原稿八月を目途にお寄せください。お待ちしています。

編集子